

Title	子どもの生と死：周産期医療から見えること(臨床死生学研究講演会)
Author(s)	斎藤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.4, 2012.2 : 17-17
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3705
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

臨床死生学研究講演会

子どもの生と死

—周産期医療から見えること—

2011年12月16日（金）、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催による講演会が、聖学院大学ヴェリタス館教授会室において開催された。講演者は船戸正久先生（大阪発達総合療育センター 重症心身障害児施設フェニックス園長）で、参加者は28名であった。講演の概要は以下の通りである。

医療技術の発達により、現在では、300グラム以下の超未熟児の生命も救われるようになってきている。しかし、超低出生体重児は育たない事もあるし、重度障害が現れる場合もある。生まれた子どもが育たないと分かっている場合、どのような処置を取るのが、子どもと家族にとって最善の方法となるのかを考える必要がある。

生まれてすぐ、体中に管を付けられ、保育器に入れられて、家族は新生児を抱く事も触れる事もできないまま、小さな命が消えてしまう、という旧来の状況は、家族の悲嘆を長引かせる結果につながるが多かった。最新の「胎児緩和ケアの概念」では、「不快な症状をコントロールし、家族が、赤ん坊との死別の準備ができるようにする」。体につけるチューブ類を最小限にし、新生児を家族が抱けるようにすると、死別の悲嘆が軽減される。子どもを失うことは悲しいことである

が、短い間でも、愛する家族に囲まれて「うち」で過ごし、家族に抱っこされてなくなっていった子どもは、本人も家族も苦痛が少ないのである。

亡骸を安置する霊安室も、従来は地下などの、暗い場所にあることが多かったが、最近では、最上階の明るい場所に設ける医療施設も増えてきており、愛するものを失った家族の悲しみを軽減する一助となっている。

新生児の医療にとって大事なのは、「子どもの最善の利益」を中心に、医療チームと家族が情報を共有し、予後の見通しから、共に最適な医療の選択ができるようにすることである。現在の小児医療の最大のテーマは、自分で意思表示ができない子どもの人権と尊厳をいかに守るか？とくに生命予後不良な子どもにとって、最善の医療とは何かを考えることである。そのために、今後すべての医学部、看護学部のみならず、基礎講座を導入し、「臨床倫理学」「緩和ケア」の基礎講座を導入し、技術偏重の日本の医療を変える土台とする事が重要である。

（文責：斎藤薫 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究課博士後期課程）

（2011年12月16日、聖学院大学ヴェリタス館教授会室）



講師の大阪発達総合療育センター重症心身障害児施設フェニックス園長 船戸正久氏